

小学生の読書体験が学習意欲に及ぼす影響

野崎 裕司

近年、学力の低下とともに児童の学習意欲の低下が問題となっている。学習指導要領の改訂とともに教育現場では学習意欲を高めるための様々な取り組みがなされているが、どのような取り組みが効果的であるのかについての実証的検討は少ない。このような状況において、本研究では学習意欲を向上させる方法の1つとして読書の効果を検討する。先行研究では、読書の効果には「学習意欲を身につける」効果があることが示唆されている。また、教員の実感として朝の読書や読み聞かせにおいて、児童の学習意欲が高まったという報告がある。そこで、本研究では読書だけではなく、朝の読書や読み聞かせなどの読書活動を含めて「読書経験」として、読書と読書活動が学習意欲に及ぼす影響について検討する。

調査方法は、読書体験が学習意欲に及ぼす影響を検討するために、小学校5、6年生を対象に行い、読書量、読書の多様性（読んでいる本の種類数）、読書活動（朝の読書、読書感想文、調べ学習、読み聞かせ）の楽しさ、読書活動の頻度が学習意欲（集中力、自己向上感、授業に対する積極性、授業に対する真面目さ）にどのような影響を及ぼすか、2時点での縦断調査および重回帰モデルを用いた分析によって検討した。重回帰モデルとは、複数の独立変数が従属変数に与える影響を予測する方法である。

本研究の分析対象者は、分析対象者は第1回質問紙調査、第2回質問紙調査で回答を得られた小学校5年生299名（男子162名、女子137名）、小学校6年生190名（男子101名、女子89名）であった。主な結果は次の4点であった。

1. 読書量が多いほど、しっかりノートを取るといった授業に対する真面目さに影響の傾向が見られた。
2. 調べ学習を楽しんでいると感じているほど、自己向上感、授業に対する積極性、授業に対する真面目さが高まることが示された。
3. 読み聞かせを楽しんでいると感じているほど、集中力、自己向上感、授業に対する積極性に影響の傾向が見られた。
4. 朝の読書の実施頻度が多いほど、学習意欲とその下位項目（集中力）が高くなることが示された。

本研究では、読書については読書量全体、読書の多様性の指標を用いて分析したが、さらに本の種類ごとに読書の影響を分析していく必要がある。また、本研究では小学校での実践が多い読書活動についての分析を行ったが、今後はアニメーションのような他の読書活動についても検討していくことが望まれる。

（指導教員 鈴木佳苗）